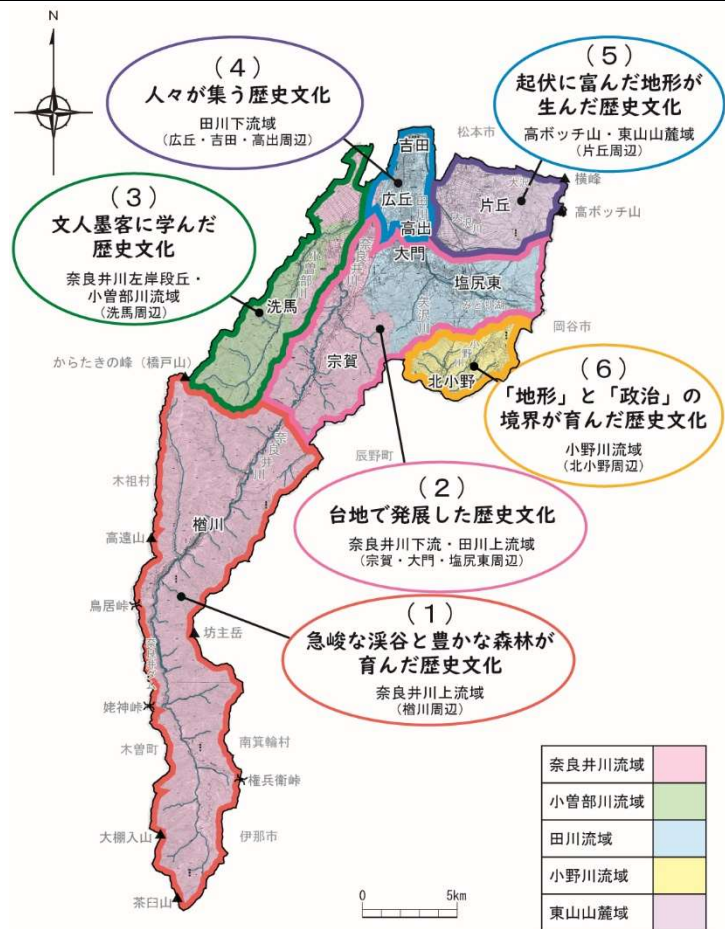


2 歴史文化の特徴② 6つの地域ごとの歴史文化

本市は、その地理的特性により水系の上流域に位置することから、山や川等、地形的な要因によって地域にそれぞれの特徴が生まれました。さらに、そのような中で街道を基盤とした他地域との交流や、近世以降の所領の変遷に起因する、地域によって異なる多様性のある歴史文化が育まれました。これらは、市内の主要な河川の流域や山麓等によって6つに分けることができ、それぞれの地域で形成された多様な歴史文化は、本市の特徴の一つといえます。



6つの地域の範囲

(1) 急峻な溪谷と豊かな森林が育んだ歴史文化 ～奈良井川上流域（檜川周辺）～

奈良井川上流域に位置し、市域最南端の鳥居峠から松本盆地最南端の平野部入り口にかけての地域で、旧檜川村の範囲に該当する地域です。周囲を山林に囲まれ、奈良井川によって形成された急峻な溪谷と限られた平坦部は、畿内と地方部を結ぶ「道」として利用され、その歴史は古代までさかのぼると考えられています。

畿内から陸奥国に至る古代官道として設けられた東山道は、美濃国から信濃国の時代は、現在の岐阜県中津川市から神坂峠を越えて、長野県阿智村に入る道筋でした。やがて交通が困難であった神坂峠を回避するために木曾谷に開削されたのが「吉蘇路」と考えられています。近世には、この吉蘇路が中山道の道筋として利用され、木曾谷には奈良井や贅川を含む11の宿場（木曾11宿）が置かれ、贅川には木曾11宿の北の入り口として関所が置かれました。また、中山道屈指の難所である鳥居峠を控えた奈良井は、「奈良井千軒」と謳われるように、多くの旅人で栄えた宿場町で、現在でも当時の町並みが残り、重伝建地区に選定されています。

また、この地域は約9割が森林地帯で、豊臣秀吉の時代に課せられた木年貢（木材で納める年貢）にみられるように、森林資源が本地域の人々の暮らしを支えていました。しかし、安土桃山時代以降、城郭や社寺建築の木材需要が急増し、江戸や駿府、名古屋の城と城下町等の建設のために膨大な用材が伐り出され、深刻な森林資源の枯渇に陥りました。やがて木曾谷を所管する尾張藩は、江戸時代初

期から木曾檜等の伐木への制限に乗り出し、木年貢も廃止しました。森林保護政策により山での採集を制限された領民に、木曾代官山村良豊は曲物・漆器等の工芸品をはじめとした地場産業を積極的に奨励しました。陶器に比べ、軽く壊れにくい木工品や、漆を施し耐久性を高めた漆製品は土産物として人気があり、中山道の流通を生かし、本地域から全国に広まりました。

この地域は「急峻な溪谷と豊かな森林が育んだ歴史文化の地域」といえるでしょう。

（２）台地で発展した歴史文化 ～奈良井川下流・田川上流域（宗賀・大門・塩尻東周辺）～

奈良井川下流及び田川上流域に位置する台地で、現在の宗賀・大門・塩尻東地区にあたる地域です。縄文時代より人々が集う場所で、奈良井川が形成した河岸段丘最上段の桔梗ヶ原台地の南縁に広がる平出遺跡は、縄文時代から古墳時代、平安時代に至るまでの大規模な集落跡です。特に古墳時代から平安時代の集落の遺構や出土品は、その時代の集落研究において貴重な資料となりました。

この地域では、『続日本紀』に「・・・後部牛養、無位宗守豊人等、田河造ノ姓ヲ賜ル」と開発者の名前があることや、塩尻町にある阿禮神社が延喜式内社であることから、古代において積極的に開発が進められたと考えられています。

江戸時代の中山道は大久保長安の失脚により新たにこの地域の中山道沿いに本山宿・洗馬宿・塩尻宿が整備されました。

近代には大門の一角は塩尻駅の設置により市街地として発展、政治・経済の中心地となりました。産業面でも、桔梗ヶ原台地が近代以降の開発によって一面の原野が一大果樹生産地となり、ブドウの栽培や、それを原料としたワイン醸造が盛んな地域となりました。

この地域は「台地で発展した歴史文化の地域」といえるでしょう。

（３）文人墨客に学んだ歴史文化 ～奈良井川左岸段丘・小曾部川流域（洗馬周辺）～

本市の西側、奈良井川左岸段丘・小曾部川流域に位置し、現在の洗馬地区の範囲にあたる地域です。奈良井川の段丘上に形成された本洗馬、小曾部川が奈良井川に合流する周辺の氾濫原とその西の河岸段丘上の台地からなる岩垂、東西を山並に挟まれた小曾部川に沿って南北にいくつもの集落で形成された小曾部から構成されます。

文献資料における洗馬に関する記述で最も古いものは、平安時代中期の藤原 実資の日記『小右記』で、長和3（1014）年の記事に、洗馬牧の牧 司 忠明 朝臣が、駒、牛等を貢物として納めたことが書かれています。この洗馬の牧は、朝日村と芦ノ田、小曾部等にあった牧場といわれています。江戸時代には高遠藩の領地となりましたが、その飛び地として、西五千石洗馬郷の中心をなしていました。

江戸時代後期には、多くの文人墨客がこの地域を訪れ、それらの人々の啓発と感化により洗馬文化が発達しました。紀行家の菅江真澄は、戦国時代、妙義山城主としてこの地方を支配していた三村氏が山麓に設けた居館跡に建つ庵である釜井庵で1年余を過ごしました。その間、周辺地域の習俗などを記録に収めたほか、多くの地元の青年らと交流を図りました。松本藩の浪人であった丹波花逕は天明4（1784）年にこの地域を訪れ、長興寺住職の洞月上人のもとに身を寄せ、そののちに釜井庵に住みおよそ40年、近隣の子弟を教え詩歌を作って過ごしました。俳諧の関係では、小曾部の新倉 百山、その甥にあたる兎国、洗馬の熊谷乙人が優れた俳諧を残しています。いずれも信州を代表する俳人であった諏訪の藤森素槩との関わりが深く、蕉風の俳諧を学んだとされています。

代々医家である熊谷家の初代可児永通は美濃から来ており、菅江真澄とも交流が深かったとされて

います。永通の養子である^{けいせき}碓氷は、嘉永3（1850）年から種痘を実施し、子である^{けんさい}謙斎に受け継がれて明治18（1885）年まで続けられました。これが、県下における種痘の最初の事例となりました。六代目にあたる^{たいざう}岱蔵は、多年にわたる結核研究の功績により、県下初の文化勲章を授与されています。

そのほか、幕末にはこの地で日用雑器の作陶が行われました。「洗馬焼」は、長興寺山南東の麓の窯でつくられました。さらに、「信斎焼」は日本六古窯の一つ、信楽の地から洗馬に招かれた奥田信斎により製作された陶芸品です。これらはいずれも大正期には廃業しましたが、洗馬焼は近年、関係者により復興の製陶が行われています。

この地域は、「文人墨客に学んだ歴史文化の地域」といえるでしょう。

（４）人々が集う歴史文化 ～田川下流域（広丘・吉田・高出周辺）～

田川下流域に位置し、本市の北端、北を松本市に接している平坦な地域で、現在の広丘・吉田・高出地区を含む一帯に相当します。

西側には奈良井川が流れ、田川の流域には水田が広がっていますが、そのほかは市街化が進み、商業・工業・住宅地域の都市化が最も進んだ地域です。

古代には筑摩郡六郷の一つ「良田郷」があったとされ、吉田川西遺跡や吉田向井遺跡といった大集落が田川流域に形成されました。中でも吉田川西遺跡からは、当時のこの地域では珍しい平安時代の緑釉陶器の椀や皿等のセット（長野県立歴史館所蔵・重要文化財）が出土するなど、中央とのつながりを物語っています。

江戸時代には、中山道洗馬宿と北国街道を結ぶ善光寺街道（北国脇往還）が整備されました。善光寺街道が中山道の洗馬宿で分かれて最初の宿場である郷原宿は、既に存在していた集落が宿になったのではなく、奈良井川右岸にあった集落が、左岸にあった堅石集落とともに現在の場所に移り、宿づくりがされたものです。郷原宿は江戸時代に起きた2度の大火で全焼してしまいましたが、安政5（1858）年の2度目の大火後に再建された町並みは、本棟造と整えられた家の前庭が特徴的であり、民芸運動の父と呼ばれる^{やなぎわねよし}柳宗悦が「宿場全体が見事な一個の作品だ」と絶賛しています。

歌人として『潮音』を主宰した太田水穂は、明治9（1876）年に広丘で生まれました。長野師範学校（現：信州大学）で、後にアララギ派の再興に努めた島木赤彦と同級になり、赤彦の広丘小学校赴任もあり、広丘は歌人の憩い地となりました。他にも若山牧水・喜志子夫妻や潮みどり、窪田^{うつぼ}空穂、四賀光子、中原静子等もこの地にゆかりのある歌人です。広丘は多くの歌人が集い、短歌文化が育まれたことにより「短歌の^{ふるさと}里」と呼ばれています。

この地域は「人々が集う歴史文化の地域」といえるでしょう。

（５）起伏に富んだ地形が生んだ歴史文化 ～高ボッチ山・東山麓域（片丘周辺）～

本市と岡谷市の境界北部に位置する高ボッチ山や東山の西麓、現在の片丘地区の範囲にあたります。山々の広大な裾野が広がり、裾野を流れ下りながら放射状に谷を刻み、谷と谷の間に長峰状の台地を形成しています。

この台地は縄文時代の集落を形成する上で適した環境であり、わき水や小川のある谷を水場としてつくられた縄文時代の大規模な集落遺跡が数多く存在しています。弥生時代になると、集落は山麓から稲作に適した田川流域に移り、そのひとつである下境沢遺跡からは珍しい土偶形容器が発見されています。

奈良時代には窯業生産が行われていたことが知られ、菖蒲沢窯では、五重塔を模した瓦塔や鳥形の陶硯が生産され、先進的な文化の受容があったことがわかっています。

また、重要文化財建造物である小松家住宅や、嶋崎家住宅といった江戸時代後期の民家が今でも残されており、地域の歴史文化の特徴を物語っています。

一方、本地域は、諏訪上社の荘園であった時代、武田氏、織田氏、徳川傘下の小笠原氏の支配下にあった時代、また、江戸時代には東五千石として諏訪の高島藩の飛び地に属していたなど、時代とともにその所属はめまぐるしく変わりました。高島藩の飛び地となっていた江戸時代に高島藩主が巡検に利用したとされる、塩尻宿を起点として片丘を経て松本に至る道は、五千石街道と呼ばれ、地域間の交流に重要な役割を果たしました。

この地域は「起伏に富んだ地形が生んだ歴史文化の地域」といえるでしょう。

（6）「地形」と「政治」の境界が育んだ歴史文化 ～小野川流域（北小野周辺）～

小野川流域に位置する地域で、四方を山々に囲まれた平坦部にあり、現在の北小野地区にあたります。北側は信濃川水系と天竜川水系の分水嶺である善知鳥峠を越えて松本盆地、南側は辰野町小野を経て伊那盆地、東側は東山を越えて諏訪盆地に接しています。

このエリアを代表する文化財として小野神社がありますが、その社叢を「たのめの森」と言います。清少納言の代表作である『枕草子』の中に「たのめの里」が出てきますが、これは古くから信濃国伊奈郡に属していた小野（辰野町小野、本市北小野の範囲）地域を指すといわれています。また、小野神社は信濃国二宮として、同じ社叢の中で隣接する辰野町の矢彦神社とともに、中世より武士によって崇められていました。

小野神社と矢彦神社はもともと一つの神社であったといわれていますが、安土桃山時代に盆地を流れる唐沢川を境に、北小野村と南小野村に所領が分けられたことに伴い、神社境内も分割されました。しかし、現在でも小野神社と矢彦神社の両神社で行われる御柱大祭などの祭礼や、北小野地区と辰野町小野・小野筑と合わせた「両小野」の地名に見られるように、行政の違いを越えたつながりを地域の特徴として捉えることができます。

また、江戸時代になると大久保長安によって、下諏訪宿から小野峠を越えて辰野町小野に至り、西の牛首峠を越えて贅川宿に通じる中山道が開削され、北小野宿が形成されました。加えて塩尻宿、南の宮木宿へと続く三州街道の交差点でもあったことから、宿場は栄え、その名残も感じることができます。

この地域は「地形」と「政治」の境界が育んだ歴史文化の地域」といえるでしょう。

以上の歴史文化の特徴を背景に、本市の文化財は醸成され、歴史文化の価値や多様性を現代に伝えています。